

経管栄養から経口摂取への援助

(医)南東北春日リハビリテーション病院

回復期リハビリテーション病棟

若林雅子、正木多賀子、宇佐美幸江

【はじめに】

リハビリテーション(以後 RH と略す)とは、患者の生活(活動)と人生(参加)を向上させる強力な手段であり、単に機能を回復させるためだけの訓練ではない。しかし、この生活(活動)面について考えると、RH における訓練のみでは効果は限られており、その根底に食生活の充実が大きく関わっている。

今回、経管栄養を必要としていた症例を検討することで、経口摂取の大切さ、生活の質(QOL)の向上、ひいては RH を効果的にするというを確認できたのでここに報告する。

【研究期間】

平成 16 年 12 月 1 日～平成 17 年 8 月 31 日

【研究対象】

経管栄養を施行していた患者 10 例

【研究方法】

- ①昼食時に車椅子にて食堂に移動し経管栄養を実施する。
- ②唾液飲み込みテストを行う。
- ③上記の結果が良好であれば、間食時に水ゼリーにて嚥下訓練を開始する。
- ④嚥下状態に応じて、昼食時のみミキサー食を摂取してもらう。
- ⑤嚥下状態が良好になるのにあわせて、ミキサー食の回数を増やす。
- ⑥胃チューブを抜去する。

【結 果】

経管栄養を行っていた 10 例のうち、経口摂取が可能となったのは、8 例であった。そのうち 2 例は自宅へ退院するに至った。しかし、同様の方法においても 1 例は摂取訓練の途中でむせ込みが強く断念せざるを得なかった。また、1 例に関してはミキサー食まで進み胃チューブの抜去にまで至ったが、嘔吐を機に摂食拒否となり再度経管栄養となった。

【考 察】

食事を口から摂るという行為は、それ自体が生きる意欲を高めるだけでなく、様々な神経や器官に与することで多くの効果が認められている。また、患者自身自己主張というものが表現できるようになり、これこそ回復期 **RH** を効果的に進めていく大事な要素であると考え。